

---

# 【うた腐り】拗ねるレン様【レントキ】

たかむら伊織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【うた腐り】拗ねるレン様【レントキ】

### 【コード】

NO110Y

### 【作者名】

たかむら伊織

### 【あらすじ】

pixivと同時投稿です。

ライブシーンを繰り返し見ていたら、ふっと気づいたんですよ、衣装のお揃い。

これは、レン様、見逃さないんじゃないかね？と勝手に妄想してしまいました。。。

なんかでも、違っただなあ。こんな感じじゃないんですが、こんな感じでしか書けませんでした、すみませんです…orz

「じゃ」

ライブの衣装合わせが終わった途端、背中を向けたまま右手だけ上げてさっさと出ていってしまうレンを見送って、皆は一樣に首を傾げた。

何かあったのだろうか…といろいろと憶測をする皆に、トキヤは慌てて頭を下げる。

「お疲れ様でした。すみません、お先に失礼します」

そう言って、すぐに飛び出していったトキヤを見送って、皆はそれぞれに首をすくめた。

怪しまれているだろうことはトキヤにも簡単に想像がついたが、それより大切なことがあった。

「レン！」

床を蹴るようにして歩いているレンの後ろ姿に呼びかける。

「レン！ どうしたんですか、レン」

が、レンは振り返ろうとも立ち止まろうともしなかった。

仕方なく、トキヤは走ってレンに追いつく。

トキヤがレンの腕をつかもうとするより早く、レンはトキヤの腕をつかんですぐ眼の前にある教室の中に引き込んだ。

そのまま背中を向けたままのレンの後ろ姿に、トキヤは小さくため息をついた。

「…何が気に入らないんですか？」

質問を口に出した瞬間、レンはトキヤを壁に押し付けた。

「別に気に入らないことなんてないさ」

ないなら離してください…と思ったが、口には出せない。

自分が不機嫌の理由に思い当たらないことがもう既にレンの気に入らないのだ。

「レン…？」

トキヤが顔を覗き込もうとするより早く、レンはトキヤの右腕をつかんだ。

自分の右腕に視線を送ったトキヤは…ふとあることに気がついた。

「これ…ですか？」

「これ」

それは、ライブでの衣装に合わせてつけるように言われたブレスレットだった。

「返してくるのを忘れていました」

「そうじゃなくて…！」

苛立たしそうにそう言つと、レンはトキヤの腕からそのブレスレットを外してしまった。

そのまま床に放り投げる。

「ちょ…これは返さないといけないんですよ」

「おそろい」

「え？」

「音也とお揃い」

「……ああ」

音也と並ぶパートが多いせいか、音也と同じブレスレットをつけることになっていた。

やっと理由が分かったトキヤだが、その内容に少し呆れてしまう。自分ですら気づいていない…いや、自分だから気づかないのかもわからないが、しかし…。

「振り付けとか立ち位置の問題でしょう？」

「イヤだ」

かたくなにレンは首を横にふった。

そんなことを言うなら、レンは真斗と衣装がかぶっているじゃないですか…と問いかけて、トキヤは口をつぐんだ。

そんなことまでチェックしていると思われるのもしかただったし、そんなことを無意識に覚えている自分が悔しかったから。

トキヤは黙って床に転がったブレスレットを机の上に置いた。

「どうすればいいんです？ 衣装は今日もう決まっちゃって変更はできませんよ」

「決まる前にイッチーが断らないのが悪い」

その言葉、そのままあなたに返します…と言いたいところをさらにこらえる。

すると、レンは自分の腕からいつもしているブレスレットの一つを外した。

とまどうトキヤの右腕にそっとはめて、その上にそっとな唇を重ねた。

「な………！…！」

驚くトキヤの腕を勢い良く引き寄せ、そのまま抱きしめる。

「俺がいつだって言うまでそうしておかないと…恐ろしいことになる」  
「や」

「恐ろしいこと?」

「そう。例えば…」

言つなり、レンはトキヤの唇に自分の唇をそつと重ねた。

暖かい…と思う間もなく離れたその唇を追ってしまいそんな自分をトキヤは必死で抑えた。

感情を整理できない自分を隠すためにわざと乱暴にテーブルの上のプレスレットを手に取る。

「返してきます」

「俺もついていく」

「ひとりで行けます」

「きちんと返すか見届ける」

「…分かりました。分かりましたから…」

勝てないのだ。どうやってもこの男には勝てないのだ。だけど。

一方的に過ぎるじゃないですか…。

少し乱暴にドアを閉めて歩き出したトキヤを急ぐでもなく追いか

ながら。

「イッチー、何を怒ってるの？」

笑いを含んだ言葉をかけるレンの声を頭の後ろで聞きながら。

今度は私が驚かせる番ですからね……。

トキヤはひそかに決意を固めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0110y/>

---

【うた腐り】拗ねるレン様【レントキ】

2011年10月29日04時18分発行